

→ 中四国ブロック

ブロック活動報告

REPORTER

北村大河（上級指導員／高知県立障害者スポーツセンターチーフ）

アウトドア事業における障がい者スポーツ指導員の役割

2020障がい児者アウトドア事業

新型コロナウイルス感染症の影響で、全国各地の障がい者スポーツ指導の現場は大変なご苦勞をされていることと思います。高知県でも、毎年、県内の障がい者スポーツ指導員最大の活動の場となる「高知県障害者スポーツ大会」が中止となり、各地域でのスポーツ活動も縮小、指導員の活動機会も限られてしまいました。

そんな状況の中で夏を迎えて実施したのが、アウトドア事業です。換気の必要がなく、ソーシャルディスタンスも取りやすいアウトドア事業は、参加者はもちろんのこと、サポート側の我々指導員にとっても待ち望んだ活動機会となりました。

そこで、あらためてアウトドア事業で障がい者スポー



ドローンで撮影したシュノーケリングを楽しむ様子

ツ指導員がどのような活動をしているのか見ていくと、その活動内容が多岐に渡っていることがわかりました。以下にその活動内容を並べてみたいと思います。

- ・ 講師的役割（カヌーやヨットの指導、魚釣りやエビ採りの先生）
- ・ 安全管理（参加者への目配りやバディ対応）
- ・ 裏方準備（草刈や会場設営）
- ・ 医務（看護師資格を持っている方）
- ・ 活動を記録（カメラ係や今年はドローンでの撮影も）

参加者が安全に楽しく過ごすためには、どの役割も大切に欠かせないものだと思います。自然が豊かな高知県では、障がいのある方のアウトドア活動を推進していくため、アウトドア事業者間の連絡協議会（仮称）を設置する動きもあります。今後は全国的に、新型コロナウイルス感染症への対策としてアウトドア事業が見直され、新たな取り組みとしてスタートさせるケースも増えてくると思います。アウトドア事業を通じて、障がい者スポーツ指導員の活動機会がますます広がっていくことが望まれます。



新型コロナで家の中で過ごすことが多かった子どもたちもアウトドア事業を満喫しました



→ 中四国ブロック

ブロック活動報告

REPORTER

才木新一（島根県障害者スポーツ指導者協議会）

コロナに負けるな！ クラブチームの練習も再開

記録会へダッシュ!!

私たち島根県障害者スポーツ指導者協議会では、毎年春に行われる陸上競技の記録会兼全国障害者スポーツ大会予選などに参加する方の指導に尽力しています。また昨年より陸上指導では『オーストリッチクラブ』を立ち上げ、障がいのある子どもから成人まで幅広い世代がみんな一緒に、週末の時間を利用して練習に励んでいます。

『オーストリッチクラブ』の参加者も春に行われる陸上大会を楽しみにしていましたが、今年は新型コロナウイルス感染症の拡大により中止となってしまい、みなさんとても残念な様子でした。その後も新型コロナの影響が長期化し、他の様々な大会も次々と中止となって、みなさんの運動の機会も減少してしまいました。



『オーストリッチクラブ』の練習の様子



ソーシャルディスタンスを確保しながら練習を再開

夏以降も個人練習しかできないような状況が続いていましたが、ようやく現在は、少しずつクラブでの練習が再開できるようになりました。

まだまだコロナの終息が見えない中での練習のため、練習前日までの体調と体温のチェックをして、当日の検温、消毒、マスクの着用をする等、個々にも細心の注意をはらいながら練習を再開しています。練習を再開する事でチームのみなさんの生き生きした表情を見ることができて、私たち指導者も喜んでいます。

いよいよ2020年11月29日に、出雲市の第1種公認陸上競技場（浜山公園）にて記録会を行う予定です。万全の新型コロナ対策を取って、参加者みなさんをお迎えしたいと思います。



→ 中四国ブロック

ブロック活動報告

REPORTER

光田直哉 (香川県障がい者スポーツ指導者協議会)

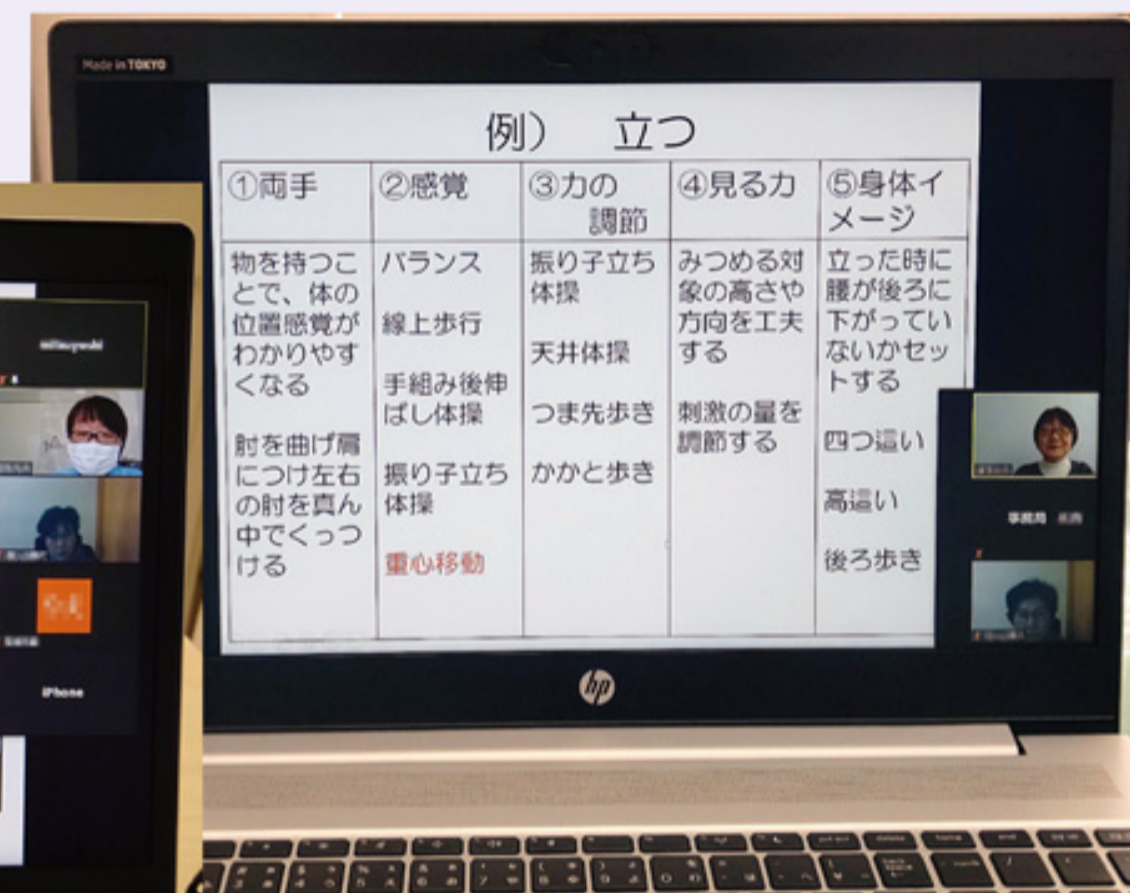
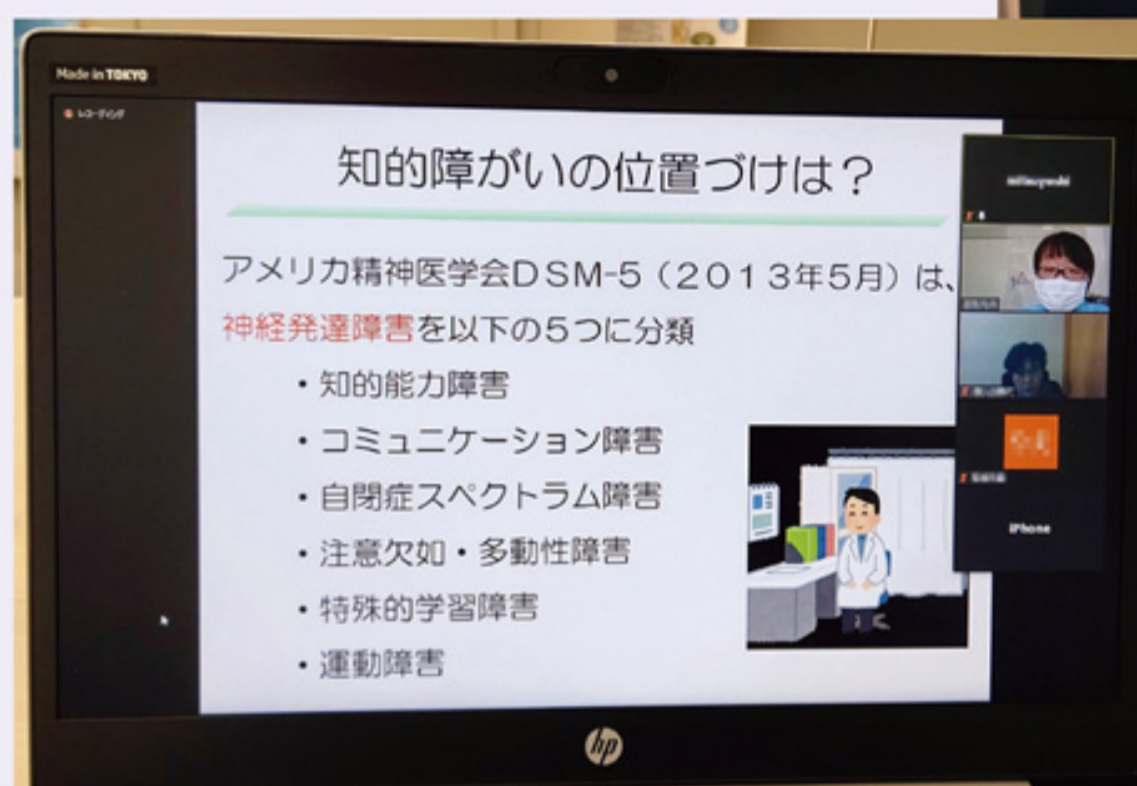
コロナ禍のIT活用によるコミュニケーション

初めてのオンライン研修開催

香川県障がい者スポーツ指導者協議会研修部では、年に1～2回、研修会を開催しています。研修会は、障がいのある方のスポーツシーンを支えるために必要な知識・技術のスキルアップ、指導者協議会員相互の交流などを目的としています。ここ数年は、①脊髄損傷、②脳性マヒ、③視覚障がいをテーマに講師の先生にお越しいただき、集合研修形式で開催してきました。

2020年度は新型コロナウイルス感染症予防・防止のために、初めてオンラインでの研修を企画することになりました。テーマは「知的・発達障がい」に設定し、90分の講義を2回(日時・内容は異なる)で実施しました。1回目は17名の会員の参加がありました。

ツールはオンラインミーティングなどでも使用されるZoomを活用しました。実施して感じたメリットは、「自宅等で受講できるため、遠方の方や交通アクセスが悪い地域に住んでいる方など普段の協議会の活動には参加しづらい方が参加できる」、「会場や印刷物、講師の交通・宿泊費等が必要なくコストが抑えられる」などでした。



オンライン研修風景

一方、やってみて初めて分かったデメリットもありました。「インターネットやアプリ等の理解が参加に必要な点」、「講師の先生や参加者同士の交流が生まれにくい点」、「動きが見つらいため演習型の研修には向いていない点」などでした。

今回、初めてのオンライン研修を行うことで様々な気づきを得ることができました。今後は、研修のテーマや目的に応じて、集合研修とオンライン研修を使い分けながら、指導者のスキルアップを図り、香川県の運動・スポーツ環境の充実に取り組んでいきたいと思えます。

また、今回は香川県の会員のみを対象にしましたが、今後は中・四国ブロックで連携しながら他県の会員にも参加してもらえよう体制にしていきたいです。



→ 中四国ブロック

新施設紹介

REPORTER

檜山恵理（一般社団法人鳥取県障がい者スポーツ協会）

鳥取県に障がい者スポーツの新拠点

鳥取ユニバーサルスポーツセンターノバリアがオープン！

令和2年7月11日、鳥取県立布勢総合運動公園内に、新たな障がい者スポーツの拠点、鳥取ユニバーサルスポーツセンターノバリア（運営：一般社団法人鳥取県障がい者スポーツ協会）がオープンしました。

施設の名称であるノバリア（NOVARIA）について、NOVAは、ラテン語で「新しい」、ARIAはイタリア語で「旋律、空気」という意味があり、全国から応募された412点の名称から選ばれました。日本語の発音ではノーバリア（No barrier）とも聞こえ、誰もが障がいの有無に関わらずスポーツを楽しみ、新しい空気をもたらす、新しい音を奏でる、そんな場所であってほしいという願いもこの名前には込められています。

この施設ではスポーツ広場（バスケットボール1/2面）や車いすユーザーでも使用しやすい機器を備えたトレーニングルーム、研修やダンスなどに利用できるマル

鳥取ユニバーサルスポーツセンターノバリア



チルームを備えており、障がいの有無にかかわらず多くの方が運動・スポーツを楽しむことができるスポ



スポーツ広場とトレーニングルーム

ーツ教室や、スポーツに関する健康や栄養、トレーニングに関することなどを専門家に相談できる相談事業などを行なっています。

また、障がいのある方が安心してスポーツを楽しめる環境づくりの一環として、障がいのある方と一緒にスポーツを楽しむ、支える、または応援する人材を多く育成するための「ガイド人材育成事業」も行っており、2021年度は年9回の研修会を通してスポーツのサポートネットワークを構築し、年間延べ123名のサポーターが県内のスポーツ活動にて活躍されました。

鳥取県では、障がいのある方のスポーツ実施率50%を目標としています。そのために、ノバリアを中心に鳥取県全体で障がい者スポーツを支えられる環境を構築し、スポーツを通じた共生社会の実現の一步となるような取り組みを今後も進めていきたいと思ひます。



鳥取県の障がい者スポーツを支える新拠点



→ 中四国ブロック

ブロック活動報告

REPORTER

藤下裕文・山本眞穂・石本菜歩（広島県障がい者スポーツ指導者協議会クラス分け部会）

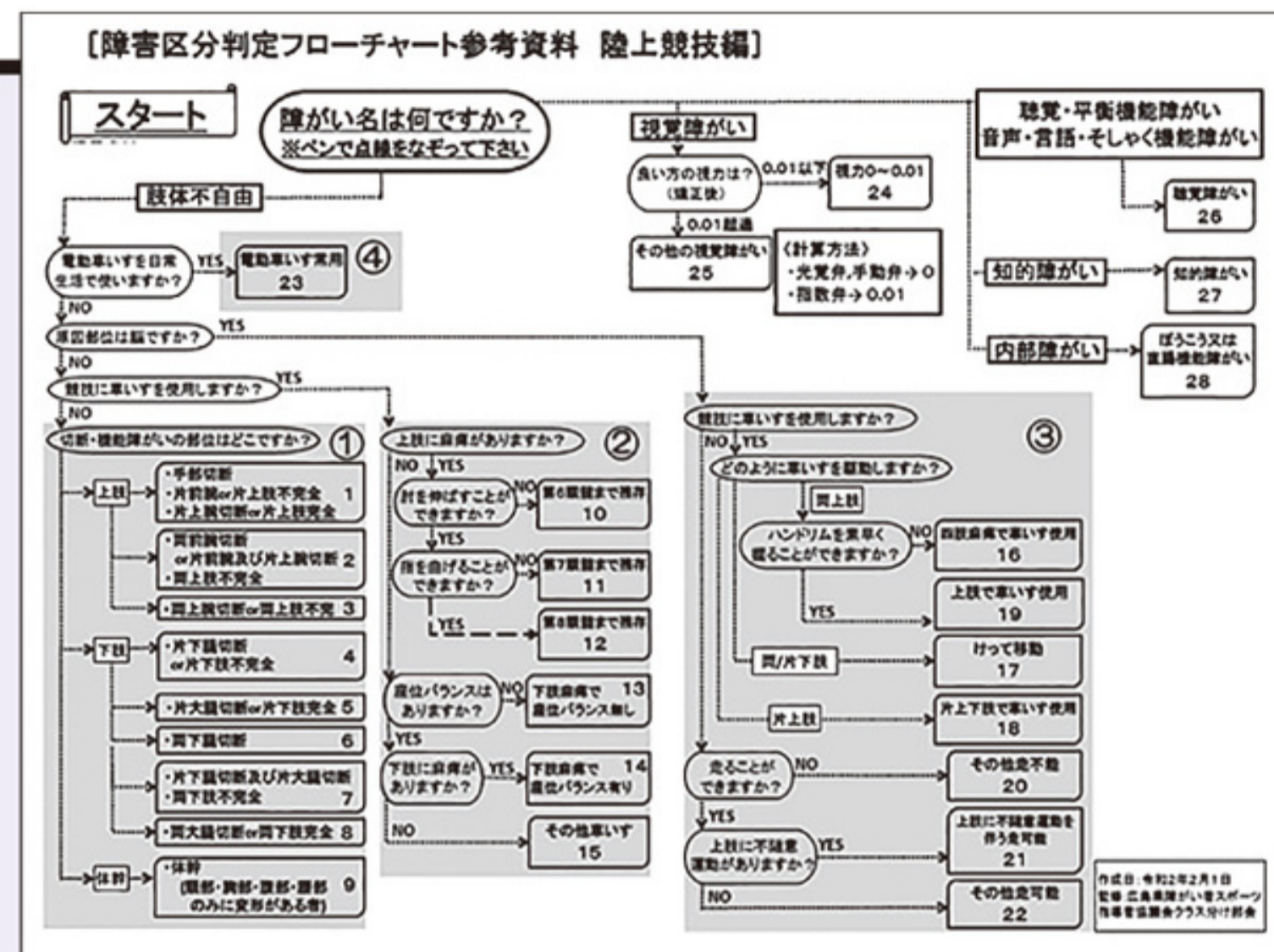
「区分分けフローチャート」作成など新たな取り組みも

広島県のクラス分け部会の活動

現在、広島県障がい者スポーツ指導者協議会クラス分け部会では7名の理学療法士が活動しており、医学的視点を持ちつつ各種競技の区分判定の支援を行なっています。主な活動としては、区分判定の実践、指導者協議会スタッフへのアドバイス、区分判定に関する知識の普及です。

4月11日に第24回広島市障害者水泳大会が開催され、私たちはクラス分け部会員として初めて参加させていただきました。コロナ禍での開催であり、徹底した感染対策のもと活動を行いました。私たちの役割は、障がい者手帳に記載された情報をもとに事前に参加選手の障害区分を確認し、大会当日実際に選手の状態を再確認して、最終的な区分の決定を行うことでした。今回の活動を通して、区分判定を実施する際には選手を多面的に評価し、その結果を客観的かつ対象者に納得していただける説明が必要であり、区分判定の難しさを感じました。より公平に競技を行うために、適切な区分判定が重要であることを再認識できたことは貴重な経験となりました。

現在、当部会では感染対策の観点からオンラインでの会議を導入しています。月1回程度、本県で開催される競技大会や講習会に関する情報の共有や今後の活動方針について意見交換を行なっています。県内のイベントの



障害区分判定フローチャート（陸上競技編）

多くが中止となる中、部会の活動のひとつとして、全国障害者スポーツ大会の競技規則に沿った「区分分けフローチャート」を作成しました。競技ごとにフローチャートを作成し、実際に県内の各大会や講習会で試験的に使用しています。作成にあたり、私たちにとっても競技や区分についての理解を深めることができ、現場からも“区分分けのスクリーニングとして時間の短縮につながった”、“運営スタッフも確認しやすかった”等のコメントをいただきました。

今後もクラス分け部会員として、正確かつ円滑な評価技術を身に付け、適切な区分判定が行えるよう活動していきたいと思ひます。



→ 中四国ブロック

ブロック活動報告

REPORTER

山本 健 (上級指導員 / 山口県障がい者スポーツ指導者協議会研修部会)

ハイブリッド型研修会で開催

「コロナ禍でもできるスキルアップ」研修会

コロナ禍で思うように活動できず、ストレスを抱えている指導員の方も多いのではないのでしょうか。私もそのひとりで、モチベーションを保つことの困難さを感じている日々です。

さて、このような中、山口県障がい者スポーツ指導者協議会の研修会を8月に「ハイブリッド型研修(対面研修とオンライン研修を同時に実施できる研修形態)」で開催しました。「ハイブリッド型研修」は、受講者が研修環境を選択でき、移動時間が軽減できる半面、機器の接続や受講者間のコミュニケーション、実技研修の難しさがあります。

そこで、開催にあたっては、下関市障害者スポーツセンターのフォローアップ研修と共催で行うことにより、通信環境の整備ができました。また、研修のテーマを「コ



いすに座ってできる運動

ロナ禍でもできるスキルアップ」とし、自宅やオンラインでできる運動やコミュニケーションの方法を研修

の中に取り入れることとしました。

内容は、①「車椅子や椅子に座ってもできる選手が自宅で自分でもできる体力づくり」(講師：山口県理学療法士会 松浦和文氏)、②「コミュニケーションスキルの基礎」(講師：北九州市レクリエーション協会 尾中美穂氏)で、実際に座ったままできる運動を行ったり、会場とオンライン参加の方が意見交換をしたりしながら研修を進めました。参加者は、対面6名、オンライン20名(県外4名を含む)で、各自のニーズに合わせて研修を受けることができました。

現在、「ハイブリッド型研修」の第2弾として、「東京2020パラリンピック報告会」を2月に開催予定です。これは、東京パラリンピックで活動された県内の指導者の体験談を聞くことで、指導員が新たな一步を踏み出すヒントを共に考える機会にしたいと思い、企画したものです。

今後も「コロナだからできるようになったこと」と、前向きに考え、指導員のスキルアップに向けてできることを模索していきたいと思えます。



右側のスクリーンにはオンライン参加のみなさん



→ 中四国ブロック

ブロック活動報告

REPORTER

古野哲一（徳島県障がい者スポーツ指導者協議会情報部会）

徳島県のボッチャの登竜門に！

ノーマピックボッチャ大会



ノーマピックボッチャ大会

ボッチャはリオ2016パラリンピックにおいて、混合団体BC1-2で日本が銀メダルを獲得したことで、地域でのブームに火が付きました。東京2020パラリンピックで杉村英孝選手が個人BC2で金、ペアBC3で銀、チームBC1-2で銅と日本選手が大活躍してくれたことも記憶に新しいと思います。

徳島県でもボッチャ普及のための体験教室など、たくさんのイベントを実施しています。2017年より徳島県障がい者スポーツ協会が主催して、「ノーマライゼーション」「パラリンピック」「ボッチャ」の名前を組み合わせ、「ノーマピックボッチャ大会」と名付けた大会を始めました。大会は、誰もがボッチャを楽しめるように独自のルールを設け、1組5名のチームエントリーで試合

は3名（うち障がい者2名）の団体戦で行われます。障がいの区分を問わず実施することで、気軽にできるスポーツとして県内に広がっていきました。

参加チームは、初年度10組程度でしたが、2019年には30組以上がエントリーして一気に人気が高まりました。しかし、新型コロナウイルスの影響があった2020年度からは、感染対策の観点からエントリー数を制限し、ゲームの後の消毒等を徹底して実施しています。

回を重ねるごとに選手のみなさんはレベルアップしてきました。優勝候補が早々に敗退するなど、僅差の熱戦が見られることもあります。また早々に敗退したチームも敗者同士で交流戦を行い、お互いの技術向上や人的交流も図れるように配慮されているため時間を忘れて楽しむことができるのが大会の醍醐味となっています。

指導員は、大会の審判補助や交流試合の審判など多くの場面でサポートさせていただいています。このノーマピックボッチャ大会を登竜門として、将来的には「全国障害者スポーツ大会」や「日本ボッチャ選手権大会」に出場する選手が多く生まれることを期待しています。



この大会をステップに競技ボッチャの選手を輩出することが目標



→ 中四国ブロック

ブロック活動報告

REPORTER

赤木 弘 (岡山県障がい者スポーツ指導者協議会 会長)

3年ぶりに開催の大会、競技運営を力強く支えた指導員！ 岡山吉備高原車いすふれあいロードレース

岡山県障がい者スポーツ指導者協議会では、毎年開催されている「岡山吉備高原車いすふれあいロードレース」へ多くのスポーツ指導員が競技役員として参加し、大会の支援協力をしています。

1988年からスタートした本大会は、ノーマライゼーションの理念の下に整備された吉備高原都市で行われます。近年“ダイバーシティ&インクルージョン”が重視されていますが、大会が始まった当時から、車いすランナーと一般ランナーが同じコースを走るという時代を先取りしたレースを展開しており、共に競い合うことによってお互いの理解を深め、交流を広めるとともに、さらに競技力向上と健康や体力づくりを図り、障がい者スポーツへの理解と関心を高めてきました。

この競技運営にはスポーツ指導員が当初から積極的に参画していて、企画した各諸先輩方の意気込みや対応力に敬意を表し、感謝しているところです。そして大会に

3年ぶりの大会のスタート



大会を支えた障がい者スポーツ指導員

関わってきた指導員の先輩から後輩へと想いと役割を受け継ぎながら、指導者協議会がこの大会の歴史を支えてきました。

新型コロナウイルス感染拡大の影響によって、残念ながら2年連続で中止となりましたが、今年10月9日に、車いす選手41名、一般選手821名、大会スタッフ660名で3年ぶりの開催となりました。選手の皆さんが密にならないようスタート・ゴール位置を変更するなど感染対策に万全を期し、安心して競技できるように各役員、係員が活躍しました。

今後もスポーツ指導員は障がい者スポーツの競技運営に携わり、リーダーとして活躍または指導育成に努め、地域の障がいスポーツ振興に協力支援をしてまいります。

現在、岡山県障がい者スポーツ指導者協議会では、スポーツ指導者や障がい者スポーツに興味のある方へ、Facebookやホームページを通じた情報発信も行なっています。そちらもぜひご覧ください。

<https://www.facebook.com/profile.php?id=100037636494106>





→ 中四国ブロック

ブロック活動報告

REPORTER

木俣拓夢（上級指導員／愛媛県障がい者スポーツ指導者協議会 クラス分け部会）

他部会・関係団体との協力・連携を目指して

愛媛県障がい者スポーツ指導者協議会の活動



指導者協議会 クラス分け部会

愛媛県内も新型コロナウイルス感染症の影響によりパラスポーツ活動が著しく制限されましたが、ようやく「Withコロナ」

とした感染対策の下、少しずつ再開されてきました。

愛媛県障がい者スポーツ指導者協議会では、2017年に自県開催となった第17回全国障害者スポーツ大会を機に県理学療法士会との協力・連携を深めてきました。活動内容の一部としては、愛媛県障がい者スポーツ大会における全国大会出場選手選考・障害区分判定、全国障害者スポーツ大会におけるトレーナー派遣、障がい者スポーツ指導員養成講習会への講師派遣などがあり、年々結びつきが強くなってきています。

また年1回程度、県理学療法士会・県障スポ協会・県障スポ指導者協議会が連携し、障がい者スポーツ研修会を開催しています。昨年度の研修会は、愛媛県出身で東京2020パラリンピック競技大会で水泳100m平泳ぎにて金メダルを獲得した山口尚秀選手にご参加いただきました。獲得した金メダルを実際に見せていただいて、

パラリンピックまでの過程や大会についてなど大変貴重なお話を伺うことができ大盛況の研修会となりました。

さらに近年は、中国四国ブロッククラス分け部会へも積極的に参加し、他県との交流や情報共有を行なっています。今年度は部内での情報を元に、愛媛県版障害区分フローチャート（陸上競技）を作成しました。今後は県内での活用方法・改善点を話し合い、これを他競技でも作成することを検討しています。このフローチャートが県内でパラスポーツを始めるきっかけとなり、最終的には県内の競技人口増加につながってほしいと考えています。



障害区分フローチャート

引き続き、他部会や関係団体との協力・連携を深め、県内でのパラスポーツ活動に少しでも貢献したいと思っています。



3年ぶりに開催された全国障害者スポーツ大会にも参加



→ 中四国ブロック

ブロック活動報告

REPORTER

笹岡真(中四国ブロック障がい者スポーツ指導者協議会情報部会)

コロナ禍で活動停止した高知の伝統競技

精神障がい者バレーボール、再始動!

高知県の精神障がい者バレーボールは、2001年に宮城県仙台市において開催された第1回全国障害者バレーボール大会に出場をすることから大きく動き始めました。その後は、翌年に地元高知で開催された全国障害者スポーツ大会「よさこいピック高知」のオープン競技として認められ、競技の周知や精神障がいのある方々のスポーツの受け皿としての役割を担って来ていました。またバレーボールの競技力が高くない本県において、全国大会優勝という嬉しいニュースを運んできてくれました。

しかし近年は選手の高齢化などもありレクリエーション思考の方が増えてきており、さらに新型コロナによる活動停止や、ブロック予選の中止という選手のモチベーションや日常生活さ

えも脅かすような出来事があり、活動再開の目処もたない状況でした。

そういった状況を変えるため、今まで精神障がい者バレー



中国・四国ブロック予選にオープン参加



3年ぶりの参加は、チームの新しい一歩となった

ボールチーム「龍馬クラブ」に一任していた強化練習を、高知県立障害者スポーツセンター主催のバレーボール教室として開催しました。新たにバレーボールに興味をもってくれた方が参加をしてくれ、3年ぶりのブロック予選への出場に向けて練習に励みました。しかし、仕事の都合により休みを取得できない方や体力的な不安から出場を辞退される方がいてメンバー登録が5名となってしまいました。それでも、主催者や対戦相手チームがオープン参加を快く承諾いただき、高知県チームは久しぶりにブロック予選会に出場することができました。

今回の出場に至るまでには、チーム立ち上げ当初から活動されている選手、それを支えてきたスタッフたちの土台の上に新たに参加してくれた選手、スポーツセンターの協力など多くの縁と多くの感謝のお陰で確かな一歩を踏み出せました。